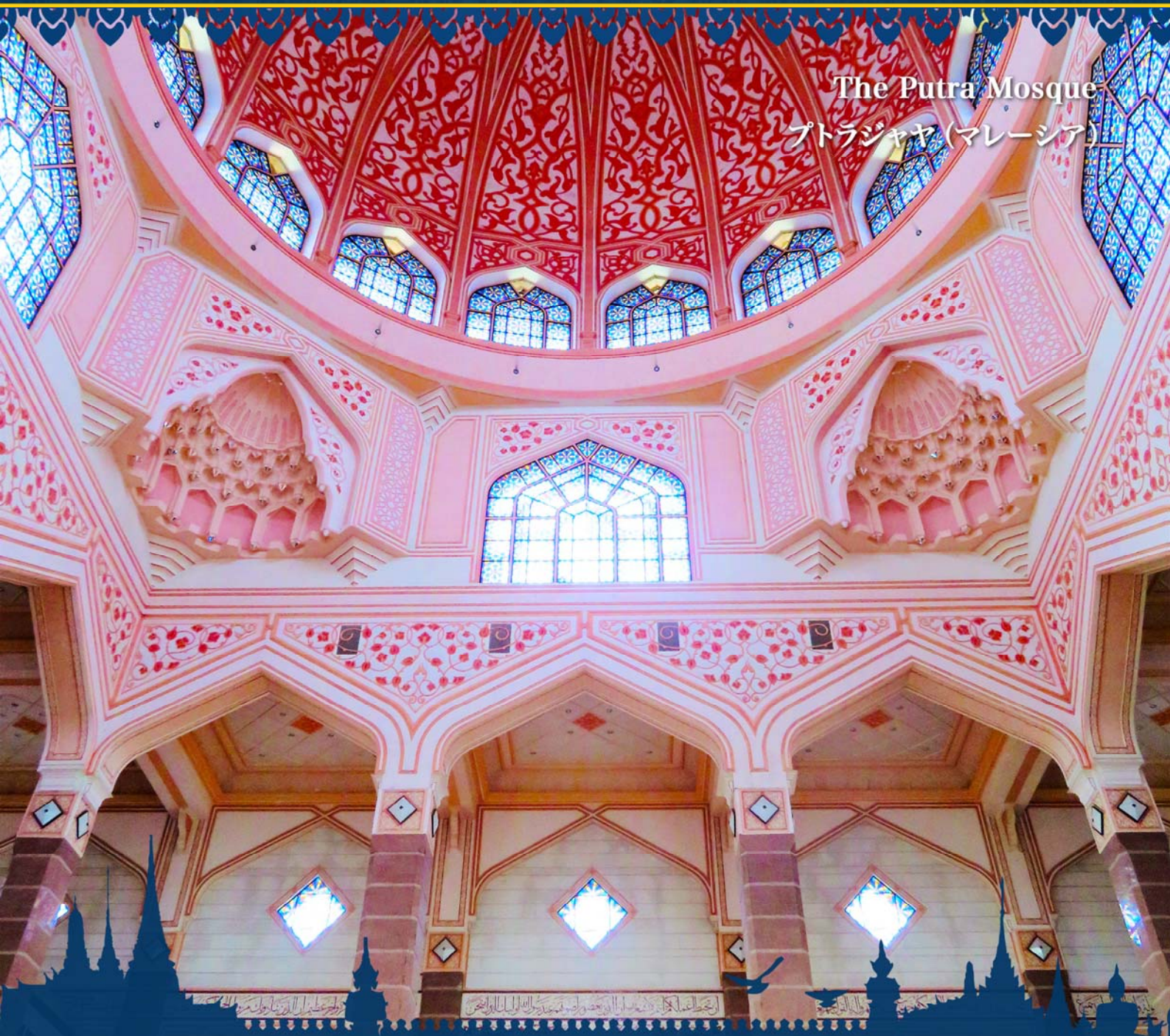


来自กรุงเทพฯ
バンコクの風



JSPS
BANGKOK
NEWSLETTER
2017-18 Vol.3



The Putra Mosque
プトラジャヤ (マレーシア)

JSPS BANGKOK
CONTENTS

JSPS主催事業説明会の開催	01	センター活動記録	19
バンコク研究連絡センターの主催セミナー・	05	コラム	20
参加イベント		学術情報 (2017年10月-12月)	22
JSPS同窓会情報	15		
特集「タイ国における大学入試制度について」	16		
キングモンクット工科大学トンプリ校			
国際関係担当学長補佐 アナック・カンタチャワナ			



センター長挨拶

バンコク研究連絡センターの活動報告書「バンコクの風」の2017年度第3号（2017年10－12月分）の発行そして新年のご挨拶をさせていただきます。

週刊「科学新聞」の元旦号に、安西祐一郎 JSPS（学振）理事長のインタビュー記事が載っています。その一部を以下のとおり引用させて頂き、当バンコクセンターが今後果たすべき役割について再認識すると共に、皆様におかれましては、本年も JSPS バンコクセンターの活動へのご協力・ご支援を、センタースタッフ一同に成り代わりお願い申し上げる次第です。

「国際性と挑戦性を全面に据えた研究に日本は舵を切らなければならない。学振に限らず研究開発に関与している組織であれば当然の方向だと思いますが、学振は研究者個人の国際性、挑戦性への『挑戦』をあらゆる分野で支援できます。だから、まず学振が先頭を切って舵を切っていきたい。」・・・（中略）

「具体的に大事なことは国際的なネットワークを張ることです。学振には海外研究連絡センターが10か所あり、外国人特別研究員のネットワークづくりをすでに始めています。外国人の JSPS フェローの多くは、日本で2－3年研究して自国へ帰っていく。その数は2万6000人にもなります。自国で影響力をもつて活動している多くの人たちが JSPS フェローだったことを誇りにして、そのネットワークはたいへん重要な情報網になり得ます」

2018年1月吉日

JSPS バンコク研究連絡センター長

山下 邦明

JSPS 主催事業説明会の開催

バンコク研究連絡センターは、タイを中心に担当国の大学等高等教育や研究機関を訪問し、JSPS 事業説明会を行っています。当センターが訪れた機関の紹介と事業説明会の様子をお伝えします。

マレーシア科学大学 (USM) にて JSPS 事業説明会を実施 (10 月 17 日)



マレーシア・ペナンにあるマレーシア科学大学 (USM) にて JSPS 事業説明会を実施しました。なお、説明会実施に当たっては、USM の日本文化センター (JCC) 副田雅紀 (そえだ まさとし) センター長にご支援、ご協力をいただきました。

説明会は、TV 会議システムにて別のキャンパスにも中継される中、JSPS 事業経験者である Abdul Rahman Mohamed 副学長 (Deputy Vice Chancellor) の開会挨拶 (写真左) で始まりました。

山下センター長より感謝の言葉を述べた後、古屋副センター長による JSPS 概要説明後、土肥国際協力員及び斉藤国際協力員による JSPS 国際事業の説明を行いました。



その後、JSPS 事業経験者である、Prof. Dato' Dr. Aileen Tan Shau Hwai にご講演いただきました。(写真左)

海洋研究センター長の Prof. Dato' Dr. Aileen は、研究拠点形成事業等の国際共同研究事業を通して得た国際ネットワークを活用し、長年日本と共同研究を実施されていらっしゃいます。

プレゼンでは共同研究の様子等、写真を交えてお話いただきました。JSPS 国際共同研究事業のワークショップやセミナーを通して、若手研究者育成にも繋がっているとおっしゃられていました。

また、説明会には、Dr. Aileen の他にも JSPS 事業経験者に複数参加いただいていたため、彼らの体験談をお話いただきましたが、昨

年度 USM で開催した事業説明会をきっかけに「第 9 回 HOPE ミーティング」に応募し、参加することができたという学生からも、その様子等についてお話いただきました。なお、今年度開催の「第 10 回 HOPE ミーティング」にも USM から 2 名参加することとなっています。

説明会には、昨年度を上回る 60 名以上の参加がありました。

質疑応答では、国際共同研究事業を中心に非常に多くの質問があり、JSPS 国際事業に対する関心の高さが伺えました。我々にとってもマレーシアの研究者に JSPS 国際交流事業を知ってもらうことができ、さらには、マレーシアの研究者がどのようなことに興味があるのかを知ることができ、有意義な事業説明会となりました。



(JSPS Bangkok Office ホームページ : <http://jsps-th.org/2017/10/17/5696/>)

JSPS 主催事業説明会の開催

インドネシア・ウダヤナ大学にて JSPS 事業説明会を実施（10 月 30 日）



インドネシアのウダヤナ大学で JSPS 事業説明会を開催しました。当センターは過去にも 2014 年に同大学で、2016 年にバリ情報科学大学（STIKOM Bali）でウダヤナ大学共催の事業説明会を実施しております。

説明会は、今回の事業説明会開催にご協力いただいたウダヤナ大学の Prof. Dr. I Gede Putu Wirawan による事業説明会の概要説明及び挨拶で始まりました。

山下センター長が感謝の言葉を述べるとともに JSPS の概要を説明し、古屋副センター長及び斉藤国際協力員が JSPS 国際事業の説明を行いました。

続いて、JSPS 事業経験者で JAAI 会員でもある Prof. Dr. Anak Agung Ayu Mirah Adi に、申請手続きや日本での研究活動の様子などを具体的にお話いただきました。



山下センター長と Prof. Dr. Anak

Prof. Dr. Anak は、JSPS がアジア諸国との交流において実施した大型プロジェクトである「拠点大学交流事業」における東京大学大学院農学生命科学研究科との研究交流をきっかけに、「論文博士号取得希望者に対する支援事業（RONPAKU）」に申請・採用され、東京大学で博士号を取得されています。

JSPS 事業経験の豊富な Prof. Dr. Anak のインドネシア語によるプレゼンテーションによって、参加者はより深い理解が得られたようです。

質疑応答では、約 50 名の参加者から英語及びインドネシア語で多くの質問があり、Prof. Dr. I Gede Putu Wirawan に通訳をしていただくなか、当初予定していた時間を大幅に超える質問がある等、JSPS 国際交流事業に対する関心の高さが伺える有意義な説明会となりました。

(JSPS Bangkok Office ホームページ: <http://jsps-th.org/2017/10/30/5753/>)

JSPS 主催事業説明会の開催

マヒドン大学パヤタイキャンパスで JSPS 事業説明会を開催（11 月 28 日）

マヒドン大学パヤタイキャンパスで JSPS 事業説明会を実施しました。同大学は、1988 年にラマ 5 世によって設立された Siriraj 病院を起源とし、その医学校は 1983 年にタイで初めて医学の学位を出しています。



1969 年にマヒドン大学と改名し、現在では、医学系を中心にタイトップレベルの国立総合大学として、世界的にも高い評価を受けています。今回は、昨年度に引き続き、医学部や理学部のあるパヤタイキャンパスで説明会を実施しました。

説明会では、先ず山下センター長（写真左）から説明会開催の感謝の言葉を述べるとともに、JST と JSPS の違い等、日本のファンディングエージェンシーについての説明を行いました。フォトセッションを挟み、古屋副センター長が JSPS 概要及び JSPS バンコクオフィス活動内容の説明を行い、土肥国際協力員及び斉藤国際協力員が JSPS 国際事業の紹介を行いました。



続いて JSPS 事業経験者であり、JSPS タイ同窓会（JAAT）会員でもある Dr. Kittiphong Paiboonsukwong（写真左）にご講演いただきました。Dr. Kittiphong は、JSPS 外国人特別研究員として埼玉医科大学で研究された経験があり、日本での研究や生活の様子についてユーモアも交えながらタイ語でお話いただきました。

説明会には、若手研究者だけでなく中堅研究者の姿も多く見受けられ、JSPS 国際交流事業に応募経験のある研究者もいらっしゃいました。Q&A セッションでは、二国間交流事業や研究拠点形成事業について、審査基準等具体的な質問が相次ぎ、JSPS 国際事業への関心の高さが伺える有意義な説明会となりました。



(JSPS Bangkok Office ホームページ : <http://jsps-th.org/2017/11/28/5820/>)

JSPS 主催事業説明会の開催

タイ国立科学技術開発庁（NSTDA）で JSPS 事業説明会を実施（11 月 30 日）



昨年度に引き続き、Thailand Science Parkにあるタイ国立科学技術開発庁（The National Science and Technology Development Agency, NSTDA）で国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）及び日 ASEAN 科学技術イノベーションプラットフォーム（JASTIP）と合同で事業説明会を実施しました。

NSTDA は、タイ科学技術省（MOST）監督の下、傘下にタイ国立遺伝子生命工学研究センター（BIOTEC）、タイ国立金属材料技術研究センター（MTEC）、タイ国立電子コンピューター技術研究センター（NECTEC）及びタイ国立ナノテクノロジー研究センター（NANOTEC）の 4 つの研究所を持ち、タイの科学技術における研究開発、技術移転、人材育成などを担っています。

説明会は、JSPS 事業経験者で JAATI 会員でもある NSTDA の Assoc. Prof. Chanwit Tribuddharat, Vice President の挨拶で始まりました（写真左）。山下センター長が感謝の言葉を述べるとともに JSPS 概要及び JSPS バンコクセンターの活動を説明し、古屋副センター長及び斉藤国際協力員が「外国人研究者招へい事業」、「論文博士号取得希望者に対する支援事業」、「二国間交流事業」及び「研究拠点形成事業」等、JSPS 国際交流事業の説明を行いました。

次に、小林義英 e-ASIA スペシャルコーディネーターが JST 概要を説明するとともに、JST 国際事業である「e-ASIA 共同研究プログラム」及び「さくらサイエンスプラン」、そして、JST が国立研究開発法人日本医療研究開発機構（AMED）及び独立行政法人国際協力機構（JICA）と共同で実施している「地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム（SATREPS）」の紹介を行いました。

最後に、京都大学アセアンセンターの藤枝絢子副所長から、日本と ASEAN の関係を強化し、ASEAN 地域の科学力の向上を図ることなどを目的とした「日 ASEAN 科学技術イノベーション共同研究拠点（JASTIP）」の紹介がありました。今回のガイダンスでは、JST 及び JASTIP と 3 者合同で実施することにより、日本のファンディングエージェンシーやそのプログラムについて、タイの研究者に対して包括的に説明することができ、有意義な事業説明会となりました。



小林義英 e-ASIA スペシャルコーディネーター



藤枝絢子副所長

(JSPS Bangkok Office ホームページ : <http://jsps-th.org/2017/11/30/5836/>)

バンコク研究連絡センターの主催セミナー・参加イベント

バンコク研究連絡センターでは、対応機関であるタイ学術会議（NRCT）と学術セミナーを共催しているほか、タイ国内外で実施される国際的な学術シンポジウムやイベントに積極的に参加し、ASEAN 地域の最先端の学術情報の収集に努めています。

第1回 JSPS インドネシア同窓会（JAAI）シンポジウム及び同窓会総会の開催（10月27日～28日）



今年の3月に設立された JSPS インドネシア同窓会（JAAI）の第1回 JSPS インドネシア同窓会（JAAI）シンポジウム及び同窓会総会がインドネシア・西ジャワ州の Cibodas Botanical Garden で開催され、当センターから山下センター長、古屋副センター長、斉藤国際協力員が出席しました。

開会式では、シンポジウム責任者である Dr. Puspita Lisdiyanti（写真・左）、JSPS のインドネシアにおけるカウンターパートであるイン

ドネシア科学院（LIPI）の Dr. Siti Noermali yati Purnomo 事務局長（写真・右）、インドネシア研究技術高等教育省科学技術高等教育資源総局（DG-RSTHE）の Dr. Muhammad Dimiyati が挨拶を行いました。



また、当センターが所管している地域の同窓会（タイ・バングラデシュ・フィリピン・ネパール）の中から参加した JSPS フィリピン同窓会（JAAP）会長の Dr. Susan Gallardo 及び山下センター長も引き続き挨拶を行いました。

フォトセッションを挟み、シンポジウムのテーマである「The Role of JAAI to Promote Food, Water, Energy, Human, and Environmental Security」に沿って、日本及びインドネシアの合計5名による基調講演が行われました。

ボゴール農業大学の Dr. Drajat Martianto（写真左）は、Food Security をテーマに「Current Status on Food and Nutrition Security in Indonesia: Challenges and Opportunities」と題して国際統計及び政府統計等、様々な統計を用いてインドネシアにおける食料状況について説明されました。



LIPI の Dr. Anto Tri Sugiarto（写真左）からは、Water Security をテーマに「Sustainable Water Management in Small Island: One Island, One Plan, One Water」と題した講演がありました。

講演では、インドネシアは多くの小さな島があり、その島々に対して水の供給量が不足していることから、LIPI と政府が解決に向け進めているプログラムについても説明がありました。

バンコク研究連絡センターの主催セミナー・参加イベント



A-WING インターナショナル株式会社の中村廣秀 代表取締役会長（写真左）からは、Energy Security をテーマとした講演がありました。

中村社長は、国土の広く人口の多いインドネシアに強力な電力基盤を作るために日々尽力されており、その取り組みを交えながら日本の中小企業やベンチャー企業の持つ技術を用いて地産地消の電力システムを構築する必要があると説明されました。



京都大学東南アジア地域研究研究所の水野啓連准教授（写真左）には、Human Security をテーマに「Development and Human Security in Asia: Japanese Experiences and Indonesian Challenges」と題して講演頂きました。

講演では、戦後の日本の高度経済成長によって得た豊かさと引き換えに自殺率が増加したこと、公害が広がったこと等、失ったものに焦点を当て、インドネシアのこれからの発展に向けて日本の経験を参考にして欲しいと伝えていらっしゃいました。

LIPI 生物学研究センターの Prof. Dedy Darnaedi（写真右）は、Environmental Security をテーマに「The Rules of Botanical Gardens and Sustainable Use of Biodiversity」と題して、LIPI が運営に関わるインドネシア国内の 30 の Botanical Garden を紹介するとともに、植物多様性の研究教育、エコツーリズム、持続的な活用等、その役割について説明されました。

シンポジウムには JAII 会員や JSPS 事業経験者を中心に、民間企業等の一般参加者も含めて約 120 名の参加があり、それぞれの基調講演に対して会場から多くの質問があがる等、活発な意見交換が行われました。



その後のプレナリーセッションにおいても、シンポジウムのテーマに沿ってそれぞれの研究者から研究成果等の発表が行われました。

バンコク研究連絡センターの主催セミナー・参加イベント

最後に、JSPS インドネシア同窓会（JAAI）会長の Prof. Subyakto（写真下・左）から参加者及び関係者への感謝の言葉が述べられました。また、シンポジウム会場では、ポスターセッションも行われており、全 21 のポスターの中から選ばれたベストポスター賞の発表（写真下・右）がある等、大きな盛り上がりの中、シンポジウムの幕を閉じました。



シンポジウムに続き、JAAI 総会が行われ、JAAI 会長の Prof. Subyakto から JAAI の活動内容について説明及び報告があり、今後の活動等について協議が行われました。

シンポジウム及び同窓会総会を通して、JAAI メンバー及び一般参加者の活発な交流が垣間見られ、今後も JAAI の発展が期待される素晴らしいシンポジウムとなりました。



(JSPS Bangkok Office ホームページ : <http://jsps-th.org/2017/10/28/5733/>)

バンコク研究連絡センターの主催セミナー・参加イベント

JSPS 研究拠点形成事業「ハブ拠点との連携による東南アジア地域の畜産の生産性向上と産業動物防疫体制の強化」The 1st Joint Seminar に出席 (10 月 10 日)

JSPS 研究拠点形成事業「ハブ拠点との連携による東南アジア地域の畜産の生産性向上と産業動物防疫体制の強化」(日本側拠点機関: 宮崎大学、タイ拠点機関: 国立動物衛生研究所、インドネシア拠点機関: ボゴール農業大学)の The 1st Joint Seminar がタイ・バンコクで開催され、山下センター長、古屋副センター長、土肥国際協力員及び斉藤国際協力員がオープニングセレモニーに出席しました。



本プロジェクトは、JSPS 研究拠点形成事業 (B. アジア・アフリカ 学術基盤形成型) 2017 年度採択課題であり、各国の拠点機関に加えて、日本の東京農工大学、タイのチュラロンコン大学やチェンマイ大学他、多くの協力機関と連携して、口蹄疫や高病原性鳥インフルエンザを含む重要家畜伝染病の発生・伝播疫学や防疫対策、さらには食肉の安全性確保をテーマに拠点を構築しています。

今回のセミナーには、これらの拠点機関及び協力機関から 50 名を超える研究者及び大学院生が参加していました。

オープニングセレモニーは、日本側拠点機関の宮崎大学・三澤尚明コーディネーター (写真左) の挨拶及び本研究交流課題の概要説明で始まりました。続いて、相手国拠点機関である国立動物衛生研究所 (タイ側拠点機関) 及びボゴール農業大学 (インドネシア側拠点機関) のコーディネーターまたは代表者からの挨拶がありました。

宮崎大学・明石良副学長 (機能強化推進担当) の主催者挨拶後、JSPS バンコク研究連絡センター、タイ畜産開発局 (DLD) 及び JICA Thailand の代表者がそれぞれ来賓挨拶を行いました。



セミナーでは、イギリス・The Pribright Institute の Dr. Donald King (写真左) による “Work of the world reference laboratory for foot-and-mouth disease to monitor transboundary livestock disease out breaks” をテーマとした基調講演が行われました。この後、各国の産業動物防疫の現状、課題、現在取り組んでいる研究を確認すると共に、研究成果の共有や情報交換のネットワーク構築を目的に 10 月 11 日までの 2 日間、講演及び議論が行われました。

(JSPS Bangkok Office ホームページ: <http://jsps-th.org/2017/10/10/5671/>)

バンコク研究連絡センターの主催セミナー・参加イベント

在ペナン日本国総領事館を表敬訪問（10月17日）

マレーシア科学大学（USM）の副田雅紀日本文化センター長とともに、マレーシア在ペナン日本国総領事館を表敬訪問しました。今回の訪問では、糸井清総領事及び中川紘佑副領事に JSPS の国際事業やマレーシアでの活動状況等について説明しました。また、山下センター長からは、現在 USM を中心に JSPS マレーシア同窓会を立ち上げる準備をしている旨の説明があり、より多くの研究者に日本に来て頂くために、在ペナン日本国総領事館にもお力添えを頂きたいと協力をお願いをしました。

糸井総領事からは、日本・マレーシア双方の学術交流を進めていくことは非常に大事なことであり、JSPS の国際事業についても今後広くマレーシア内に周知していきたいとおっしゃって頂きました。また、中川副領事からは、国際事業の申請手順及び選考過程等についてご質問を頂き、山下センター長から、外国人招へい事業・論文博士号取得希望者に対する支援事業（RONPAKU）等の申請は、全て日本の大学・機関を通して JSPS の東京本部に提出する必要があること等について説明をしました。

また、USM の副田センター長からは、アジア・太平洋・アフリカ地域等から選抜された優秀な大学院生等を対象として日本で開催される JSPS の国際交流事業の 1 つである「HOPE ミーティング」について、今年度は USM からの 2 名を含む 4 名の博士課程の学生が参加する予定であり、同世代の研究者との交流やノーベル賞受賞者との交流は若い研究者にとって大変貴重な機会である、とお話を頂きました。その後も日本とマレーシアの関係をさらに強化する取り組みや支援等について意見交換を実施する等、総領事館との連携強化の重要性を再認識いたしました。



左から：中川副領事、USM 副田センター長、糸井総領事、山下センター長、古屋副センター長、土肥国際協力員、斉藤国際協力員

（JSPS Bangkok Office ホームページ：<http://jsps-th.org/2017/10/17/5689/>）

バンコク研究連絡センターの主催セミナー・参加イベント

Indonesia Science Expo 2017 に参加 (10 月 25 日)

インドネシア・ジャカルタで開催された The 2nd Indonesia Science Expo 2017 の若手研究者表彰式及びインドネシア科学院 (LIPI: The Indonesia Institute of Science) 創設 50 周年式典に参加しました。Indonesia Science Expo 2017 は、JSPS のインドネシア側対応機関の一つであるインドネシア科学院 (LIPI) 主催の科学博覧会で、2 回目の開催である今年度は創設 50 周年を記念して規模を拡大し、10 月 23 日から 26 日までの 4 日間に渡って開催されました。



LIPI 創設 50 周年式典では、LIPI 院長の Prof. Dr. Bambang Subiyanto による LIPI の活動報告の他、LIPI と学術交流を実施している機関の代表者からのビデオメッセージが流れ、JSPS 安西理事長 (写真下・左) を含め世界各国から祝福が送られました。



引き続いて行われた若手研究者表彰式では、小学生から高校生を対象にそれぞれの研究成果やポスター発表に対する表彰が賑やかに行われ、大きな盛り上がりを見せておりました。

また、翌日 26 日には、JSPS のインドネシア側対応機関である LIPI 及びインドネシア研究技術高等教育省科学技術高等教育資源総局 (DG-RSTHE) 揃っての打ち合わせを行いました。

LIPI からは院長の Prof. Dr. Bambang Subiyanto、JSPS インドネシア同窓会 (JAAI) 会長でもある Dr. Subyakto 他複数の JSPS 事業経験者が、DG-RSTHE からは Dr. Ira Nurhayati Djarot が参加し、インドネシアと日本の学術交流を促進・発展させるための JAAI の

今後の活動について議論を行いました。参加者全員からインドネシア・日本の学術交流の在り方について多くの提案があり、有意義な意見交換を行うことができました。



(JSPS Bangkok Office ホームページ : <http://jsps-th.org/2017/10/25/5724/>)

バンコク研究連絡センターの主催セミナー・参加イベント

日・マレーシア外交関係樹立 60 周年記念「Japan Day」及び「Japan Graduates Symposium (JGS) 2017」に参加 (11 月 9 日)



マレーシア・クアラルンプールにあるマレーシア工科大学 (UTM) 及びマレーシア・日本国際工科院 (MJIT) 内で開催された「Japan Day」に、当センターから山下センター長と古屋副センター長が出席しました。マレーシアでは、1980 年代から「東にある国に学べ」という東方政策 (LEP: Look East Policy) のもと、日本に多くの留学生を輩出してきました。MJIT は、LEP の集大成として、日本の科学技術や労働倫理をマレーシアにしながら身につけられるようにしようという理念のもと、両国政府により UTM の中に設置された高等教育機関です。2015 年に最初の学部卒業生を出し、現在は学部 3 学科、大学院 4 専攻、防災分野の研究および人材育成を行う防災センターに合計 1000 名強の学生が在籍しています。

毎年開催されている同イベントですが、今年は日・マレーシア外交関係樹立 60 周年を祝し、日本に留学した卒業生の同窓会組織「Alumni Look East Policy Society (ALEPS)」や高等教育の教授陣からなるシンクタンク「The National Council of Professors (Majlis Profesor Negara (MPN))」等高等教育関連機関、産業界、日・マレーシア両国政府機関も参加して、例年より大規模に開催されました。また、開会式には、60 周年記念事業の一環として日本武道館より海外派遣日本武道代表団の参加もありました。

開会式は UTM の Prof. Datuk Ir. Dr. Wahid Omar 学長の挨拶及びマレーシア日本人商工会議所 外処 (とどころ) 敏彦会頭の挨拶で始まりました。引き続き MPN Deputy Chairman で日本の大学からの招聘経験もある Prof. Ulung Datuk Dr. Shamsul Amri Baharuddin の基調講演があった後、宮川眞喜雄在マレーシア日本国大使 (写真下・左) 及びマレーシア高等教育省の YB Dato' Seri Idris Bin Jusoh 大臣 (写真下・右) の挨拶で幕が閉じました。



開会式の前後には日本武道代表団による空手および相撲の実演や、産業界からの寄付等に対する感謝状進呈も行われ、非常に華やかかつ盛大な式典となっていました。別会場では日本の文化を習っている学生による折り紙製作の展示や日マレーシアの料理を食べられるブース出展、日本武道代表団の実演も行われ、学生達も日本の文化を楽しんでいました。

バンコク研究連絡センターの主催セミナー・参加イベント

午後からは Japan Day の特別シンポジウムとして、日本とマレーシアの研究教育分野における今後のあり方について考える「Japan Graduates Symposium (JGS) 2017」が開催されました。

YBhg. Dato' Kamel Mohamad 高等教育省事務局次長からの基調講演で始まった同シンポジウムは、引き続き日本側の特別講演として在マレーシア日本大使館の黒沼一郎一等書記官、当センターから山下センター長、JST から佐藤正喜シンガポールオフィス所長が各々登壇し、日本の科学技術政策及び JSPS・JST の国際事業について説明しました。

その後以下2つのパネリストセッションが行われました。

Panelist Session 1



左から Mr. Zinuddin(ALEPS), Prof. Dato' Dr. Zaman (UKM), Dr. Ahmad (MIGHT), Mr. Kajita (JETRO)

モデレータ: Prof. Dato' Dr. Halimah Badioze Zaman, Institute of Visual Informatics, UKM

- ・ 梶田朗 日本貿易振興機構 (JETRO) クアラルンプール事務所長
- ・ Dr. Raslan Ahmad, Senior Vice President, Malaysian Industry-Government Group for High Technology (MIGHT)
- ・ Mr. Zulfiqar Zinuddin, President, Alumni Look East Policy Society

バンコク研究連絡センターの主催セミナー・参加イベント

Panelist Session 2



左から Dr. Razali (UPNM), Mr. Nakamura (AMED), Prof. Datuk Dr. Hamid (UniMy), Prof. Yamashita (JSPS), Mr. Sato (JST)

モデレータ : Prof. Datuk Dr. Khairuddin Ab Hamid, Vice-Chancellor of University Malaysia of Computer Science and Engineering (UniMy)

- ・ 山下邦明 日本学術振興会 (JSPS) バンコク研究連絡センター長
- ・ 佐藤正樹 科学技術振興機構 (JST) シンガポール事務所長
- ・ 中村浩 日本医療研究開発機構 (AMED) シンガポール事務所長
- ・ Dr. Noor Afiza Mat Razali, Chair JGS 2017, Senior Lecturer, Fellow at Cyber Security Center, National Defence University of Malaysia (UPNM)

両セッションでは今後の日・マレーシアの連携強化の必要性が改めて認識されると共に、参加者からは日本のファンディングプログラムを使用する際の日・マレーシア双方の問題点や日本の大学で勉強した同窓生の問題提起があげられる等、会場全体を巻き込んだ活発な議論が繰り広げられました。



(JSPS Bangkok Office ホームページ : <http://jsps-th.org/2017/11/09/5767/>)

バンコク研究連絡センターの主催セミナー・参加イベント

マレーシア国立大学長会議（VCC）事務局・マラヤ大学副学長 Prof. Dr. Noorsaadah ABD. Rahman を訪問（11月10日）



JSPS のマレーシアにおけるカウンターパートであるマレーシア国立大学長会議（VCC）の事務局を訪問しました。同事務局はマラヤ大学の中に設置されており、JSPS の外国人研究者招へい事業経験者で同事務局を運営している Prof. Dr. Noorsaadah ABD. Rahman 副学長と意見交換を行いました。

同意見交換では、当センターから前日11月9日にマレーシア工科大学で開催された「Japan Graduates Symposium (JGS) 2017」の報告と共に、JSPS マレーシア同窓会の新規設立について説明し、今後の設立に向けたマレーシア内での調整をお願いしました。Prof. Rahman からは、マレーシアのファンディングエージェンシーや現在の VCC の状況等をお話し頂くと共に、今後の JSPS マレーシア同窓会設立に向けての調整についてもマレーシア科学大学（USM）等と協力していく旨回答頂きました。

（JSPS Bangkok Office ホームページ：<http://jsps-th.org/2017/11/10/5785/>）

名古屋大学職員海外研修（タイ・バンコク）の来訪（11月15日）

名古屋大学職員海外研究の一環として、名古屋大学・三重大学・岐阜大学・愛知県公立大学法人・愛知教育大学の職員計7名が、名古屋大学バンコク事務所の Veeraya Chenchittikul 特任助教とともに当センターを来訪されました。来訪された職員は以下のとおりです。

- ・名古屋大学：服部里実主任、藏本沙和事務職員、加藤美緒事務職員
- ・三重大学：山本麻莉主任 ・岐阜大学：福田曜平事務職員
- ・愛知県公立大学法人：吉田百合香主事 ・愛知教育大学：市川勝規係長



今回の来訪は、同大学職員等の海外研修の一環として、海外の教育機関と意見交換・情報交換を行い、現地の日本関係機関の業務に対する理解を深めることを目的として行われており、2015年11月に引き続き当センターにお越しくださいました。

山下センター長から、JSPS の概要及びバンコク研究連絡センターの活動内容について紹介を行いました。また昨年10月に名古屋大学とカンボジア王立プノンペン大学の共催で開催された「第1回日本・カンボジア学長会議」について触れ、大学で教える教員のうち、博士号取得者はわずか5%であり、JSPS の

国際事業である「論文博士号取得希望者に対する支援事業（RONPAKU）」はカンボジアの研究者の支援として非常に有意義であること等、説明をしました。

なお、今回の研修の参加者が大学職員であることから、JSPS で大学職員を対象に実施している、国際交流に関する幅広い見識と高度な実務能力を有する専門的な職員の養成を目的とした「国際学術交流研修」についても紹介したところ、大変興味を持って下さいました。参加者からは、海外研修で苦労したこと等、次々と質問が上がり、同席した国際協力員2名からそれぞれの研修の感想を述べさせて頂き、有意義な意見交換を実施することができました。

（JSPS Bangkok Office ホームページ：<http://jsps-th.org/2017/11/15/5790/>）

バンコク研究連絡センターは、日本学術振興会の国際交流事業で訪日経験のある研究者の組織である「JSPS 同窓会」の支援も積極的に行っており、現在管轄地域内に同窓会が組織されているタイ・バングラデシュ・フィリピン・ネパール・インドネシア JSPS 同窓会の活動支援、また、ベトナム・マレーシアでの新規同窓会設立に向けても支援を行っています。

2017 年度第 5 回 JSPS タイ同窓会（JAAT）理事会に出席（11 月 2 日）

今年度第 5 回目の JSPS タイ同窓会（JAAT）理事会をタイ学術会議（NRCT）で開催しました。理事会では、以下の点について確認、議論を行いました。

1. 第 4 回 JAAT 理事会（2017 年 9 月 28 日開催）議事録の承認
2. 同窓会総会、論博メダル授与式及びシンポジウム開催について
Dr. Kampanart から、同日午前中に開催したワーキンググループとあわせて報告があり、以下のとおり開催する方向で調整することとなりました。
 - ・開催日を 2 月 8 日、会場は昨年同様 Arnoma Hotel で調整する
 - ・午前（9 時～12 時）をシンポジウム、午後を同窓会総会及び論博メダル授与式とする
 - ・シンポジウムのテーマを” Thailand-Japan: sustainable development” とし、EEC (Eastern Economic Corridor: 東部経済回廊) について基調講演及び日タイ 2 名ずつのパネルディスカッションを開催する
 - ・MC は JAAT 理事会から Dr. Kittisak が行う
 - ・BRIDGE フェローシッププログラムの報告会も同窓会総会であわせて実施、2016 年度採択者の Dr. Narongchai Autsavapornporn に報告を依頼する
3. JAAT 地方ワークショップ計画について
Dr. Kittisak から、JAAT 主催の地方大学でのワークショップについては 2018 年 3 月及び 4 月に、各々チェンマイ大学及びブラパ大学で実施するとの報告がありました。
4. JAAT 会員名簿について
Dr. Suratwadee から、JAAT 会員名簿に掲載するメッセージの提出依頼がありました。
5. JAAT 会計報告
Dr. Kittisak から、会計報告及び銀行手続の進捗状況について説明がありました。

(JSPS Bangkok Office ホームページ : <http://jsps-th.org/2017/11/02/5762/>)

今回の特集では、キングモンクット工科大学トンブリ校の国際関係担当学長補佐であるアナック・カンタチャワナ氏に、「タイ国における大学入試制度について」と題して、ご寄稿いただきました。

※寄稿の記事・論文、図表、写真等の著作権は執筆者に帰属しています。無断複製又は無断転載はおやめください。



キングモンクット工科大学トンブリ校

タイ国における大学入試制度について

国際関係担当学長補佐
アナック・カンタチャワナ

タイ国における大学入試制度について、キングモンクット工科大学トンブリ校を事例にしてこの記事を書いたのは、少しでも皆さんにタイの大学入学制度を理解していただければと思っただけです。内容は確かに、すべてのタイの大学について言及していると言い切れないかもしれませんが、少なくともキングモンクット工科大学トンブリ（KMUTT）として参考にさせていただければ嬉しいです。

では、まずタイと日本との間でいろいろと状況が違うということを知っていただきましょう。背景として、タイでは最近1年間で80万人の子供が生まれています。また、生まれる10人の子供のうち、1人（13%）は中学校を終了できず、3人（30%）は中学校を卒業し、2人（21%）は高校まで卒業し、そして残りの4名（36%）は大学か専門学校を卒業することができるというのが現状です。また、タイから少し離れますが、周りの国の状況を見てみますと、大学の進学率が日本では48%であるのに対して、それぞれタイは36%、シンガポールは34%、マレーシアは28%、フィリピンは31%となっています。ちなみにタイの大学の数は約160大学です。

そのような状況の中、大学入試はタイの政治と同様、この20年間でかなり変わってきています。高等学校と大学との間に大きなギャップがあると見られ、未だに最も良い入学制度が導入されたかは誰も自信をもって言えないでしょう。タイの入学制度は大きく分けて二通りあります。

それは、センターアドミッションとダイレクトアドミッションです。それぞれの違いは、国の統一試験を利用するか、それぞれの大学が作成している試験を利用するかです。言い換えると、現在タイの大学はかなり自由度があり、入学試験は各大学が都合の良い時に行うことができ、受験する学生は何度も受験ができます。

もう少し詳しく言いましょう。まず、センター試験ですが、タイでは「アドミッション試験」といいます。基本的に **Basic Education Core Curriculum A.D. 2008** のもとで作られた知識および考察能力を測るための試験で、**Ordinary National Education Test (O-NET)** と呼ばれています。高校（**GRADE12**）の場合、それぞれ試験科目はタイ語、数学、理学、社会・宗教・習慣、外国語があります。これらの試験点数によってだいたい自分が入学可能な大学が予測できます。最近、センター試験はほとんどの大学では最後に行うことが多いです。

一方、大学各自で行うダイレクトアドミッションでは、基本的に各大学が独自の決定権を持っていますが、**Council of University Presidents of Thailand** の決定で、共通の試験で考慮することになっています。この共通試験のことを「**General Aptitude Test / Professional and Academic Aptitude Test ; GAT-PAT**」と呼んでいます。ただし、この試験の結果以外に、各大学オリジナルの試験の点数や生徒の学校での成績なども考慮することもできます。現在 **GAT** も **PAT** も年に2回行われています。

では、もう少しこれらの試験について説明しましょう。**GAT** とは名前の通り一般知識を測る試験のことです。一方 **PAT** は専門やアカデミアの知識を測るものであります。それぞれ **GAT** は2つのセクションに分かれており、以下の通りです。

Section 1 : Reading Writing, Critical thinking, Skill and Problem solving skill

Section 2 : Ability in English communication

一方、**PAT** は大きく分けると、基礎知識と専門知識に分かれています。細かく分けると以下のようになります。

PAT1 Mathematics

PAT2 Science

PAT3 Engineering

PAT4 Architecture

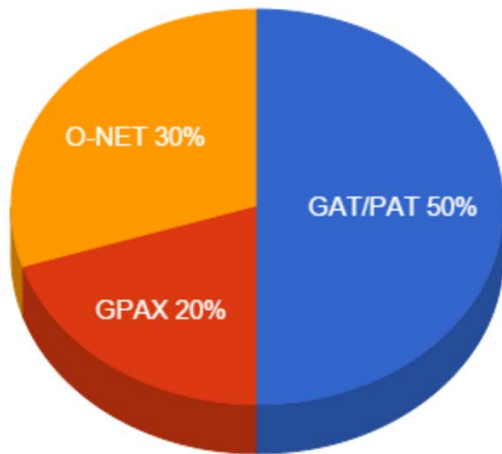
PAT5 Teacher

PAT6 Liberal Art

PAT7 Foreign language (7.1-7.8)

なお、ここで注意していただきたいのですが、**PAT** は入学希望の学部によって受験しなければならない科目が異なってきます。

一般的に大学はダイレクトアドミッションの基準を決定するのに GAT/PAT の点数の比重を自由に設定しています。例えば、KMUTT では、高校の GPAX（高校 3 年間の成績から累計して計算された点）を 30%、GAT/PAT の点数を 20%、英語の成績を 20%、KMUTT 独自の試験を 30% と振り分けています。最近数年間大学はダイレクトアドミッションを早期に行うことが多くなって来ています。1 回行うところもあれば 2 回 3 回と行うところもあります。また、最終の学生人数を調整するためにセンターアドミッションを行います。



したがって、結構多くの場合センターアドミッションがぎりぎり最後に行われています。ちなみに、センターアドミッションの試験内容の詳細は学部によって異なりますが、工学部を例にした場合、以下のような通りです。

GPAX 20% = 6,000 pts

O-NET 30% = 9,000 pts

GAT/PAT 50% total 15,000 pts
(GAT 15% + PAT2 15% + PAT3 20%)

以上のようにタイの入学制度について紹介をさせていただきました。しかし、大学の入試点数を比較するためにセンターアドミッションの点数が使われています。各学部の最大点数も最低点数も示されていますが、これらの点数は本当にそれぞれの大学のレベルを表しているのかといいますと、そうではないかもしれません。それは優秀な学生がセンターアドミッションを受けていない可能性が高いからです。むしろダイレクトアドミッションの点数で比較した方が良いでしょう。しかし、申しましたようにダイレクトアドミッションは大学によって内容が違うので、そのような比較はできません。これからタイの大学入学制度がまた変わることもあるのですが、まだまだ解決できない問題がたくさん残っているため、国全体で力を合わせて努力していかないといけないでしょう。



筆者による講演（2016 年 12 月 19 日在タイ日本国大使館で開催された

第 9 回在タイ大学連絡会（JUNThai）での講演の様子）

センター活動記録

バンコク研究連絡センターの2017年10月から12月期のその他活動は以下のとおりです。センターにはタイ及びASEAN諸国との学術の国際交流を目的とし、日本やタイの研究者や高等教育関係者が訪れます。当センターは訪問者への現地での便宜供与や学術情報の交換・助言を行っています。詳しい活動記録は当センターウェブサイト (<http://jsps-th.org/>) に掲載しておりますのでご参照ください。

10月

- 11日 京都大学 ASEAN 拠点鈴木環副所長及び吉松優希職員の来訪

11月

- 1日 アジア太平洋無形文化遺産研究センター（IRCI）岩本渉所長及び児玉茂昭アソシエイトフェローの来訪
- 15日 名古屋大学職員海外研修（タイ・バンコク）の来訪（名古屋大学服部里実主任、藏本沙和事務職員、加藤美緒事務職員、三重大学山本麻莉主任、岐阜大学福田曜平事務職員、愛知県公立大学法人吉田百合香主事、愛知教育大学市川勝規係長）
- 17日 京都工芸繊維大学 桑原教彰教授、大谷章夫准教授、堀江尚国際課長及び新井結菜さんの来訪
- 20日 山口大学三浦房紀副学長、大澤高浩准教授、山本亜希子係長、阿部絵后職員、重松隆寛職員の来訪
- 29日 国立高等専門学校機構高橋雅之執行調整役、井上強課長補佐、芳野賢志係長、澤浦文章係長の来訪

12月

- 14日 明治大学アセアンセンター長小沼廣幸特任教授の来訪、宇都宮大学後藤章名誉教授の来訪、BJSPSAA 前事務局長 Dr. Nur Ahamed Khondaker の来訪
- 15日 大阪大学望月太郎教授の来訪
- 20日 大阪大学 ASEAN 拠点長仁平卓也教授、国際部国際企画課中山由紀職員及び佐孝友香職員の来訪
- 21日 東海大学アセアンオフィス富田紘央助教の来訪
- 22日 東亜大学平松隆円准教授の来訪

齊藤国際協力員タイに魅せられて - ? -

私の地元の山口県は一家に1台ではなく、一人に1台です。父親、母親、そして、子供が成人すると各子供に1台ずつ。多くの家庭が子供の車の所有とともに駐車スペース確保の工事を行います。それは自動車が通勤・通学等、移動の手段（いわゆる足）だからです。では、私が現在暮らしているバンコクではどうでしょうか。

その前にバンコクについて少し説明します。バンコクとはタイの首都、つまり、日本でいう東京です。日本の都道府県市区町村の統計データが一覧になっているウェブサイトによると、東京の面積は2,191.00km²、人口は13,742,906人（2017年10月1日現在）となっています。タイの首都バンコクは、面積1,568.737km²、人口8,000,000人のようです（正確な数値ではないですがマイペンライ）。分かりやすく人口密度で比べると東京6,272人/km²、バンコク5,100人/km²です。

まだ分かりにくいので、山口県と比較してみましょう。山口県の人口密度は226人/km²です。なんて分かりやすい！と思うのは私だけでしょうか。みなさんも地元等の数値と比較してみるとイメージしやすいと思います。

このデータから分かるように、バンコクは東京と肩を並べる人口密度の大都会です。昨年一年間を東京で暮らし、現在バンコクで暮らしている私の実感としても同じくらい人で溢れているという印象です。

そんな2つの大都市ですが、人々の移動手段は全く異なっています。東京は電車・地下鉄等の公共交通機関です（お金持ちを除く）。バンコクは人口に対して公共交通機関の数が少ないため、基本的には車です。（バイクタクシーもありますが、危険？）

ご存知かもしれませんが、タイのタクシーの料金は、日本の10分の1以下です。私もあまりの安さに利用することが多々あります。しかし、渋滞しますよね。私なりのこれが原因だろうと思うことがあります。

ここは山口県ではないのに、「1人1台の車」。朝の通勤時間になると多くの車がマンション前で待っています。日本人が出勤するための運転手付きの車です。運転手付きの車とは日本ではどこかの大手企業の社長さんのイメージですね。しかし、こちらではそれが当たり前です。当たり前になり、お迎えの車がほんの3メートル先に停まっているのに運転手がカバンを取りに来るまでエントランス前で待っている人を見かけたことがあります。マンションに到着し車から降り、運転手が荷物を降ろしてエントランスを開けてくれるまでエントランス前で待っている人を見たことがあります。なぜ、ほんの3メートル歩かないのですか？なぜ、目の前の扉を自分で開けないのですか？と聞きたくなります。

ある研究で、一般人を監視役と囚人役に振り分けて、そのとおり何日間か過ごしてもらおうと、どんどんエスカレートして最後には暴力も振るうそうです。人間は与えられた役割を忠実にこなすようです。

もし私がそういう立場になったとしても、勘違いすることなく、怒らず、おごらず、謙虚に生きていこうと思います。

そして、渋滞の原因と思うことのもう一つは「変わらない信号機」です。タイでは、信号機が警察官による手動で赤から青、そして青から赤に変更されています。

私は趣味のフットサルに行くときにタクシーを使うことが多いのですが、たまに信号機が15分くらいずっと赤のまま変わらないことがあります。（日本でタクシーが15分も動かないとメーターが気になってしかたないですね）最初は手動ということを知らず、信号機が壊れているのではと思ったのですが、

手動切替えと知ってからは、信号機切替え担当の警察官がうたた寝しているのだろうと思うようになりました。渋滞解消にと日本式の信号システムの導入を提案しているそうですが、警察官の職がなくなるから導入しないそうです。もしコラムの外注を導入してしまうと私も仕事がなくなるかも？



(JSPS バンコクセンター最寄り BTS Asok 駅から見た渋滞の様子)

(写真・記事 国際協力員 斉藤 康平)

■海外の2大学 キャンパス新設に申請

教育省によると、世界ランキング上位 200 位に入っている海外の 2 大学が、タイにサテライトキャンパスを創設する申請をしている。

Teerakiat Jareonsettasin 教育大臣はこの火曜日に、米国のトップ大学の 1 つであるカーネギーメロン大学と、台湾の最も優れた大学である国立台湾大学が、タイランド 4.0 ビジョンにとって重要な分野である教育支援を提供するために、海外の高等教育機関にタイでの活動を許可する、というタイ政府のスキームの元、タイにキャンパスを置く申請をしていると述べた。

タイランド 4.0 は、「中所得国の罠」から国を引き上げ、タイの経済活動を革新的な「価値基盤経済」とし、さらに上の段階に到達することを目指した経済モデルである。

Teerakiat 大臣によると、カーネギーメロン大学は物流工学分野のコースを提供し、国立台湾大学は高度工学コースを提供する予定である。「彼らの申請は、高等教育委員会 (Ohec) の事務局が受け取っており、正式に承認されるために内閣に提出されるだろう」と Teerakiat 大臣は述べた。

今年の Times Higher Education University Rankings によると、カーネギーメロン大学は 24 位、国立台湾大学は 198 位にランクされている。Teerakiat 大臣は、これらの 2 つの大学に加えて、英国と日本の多くの一流大学が、タイにキャンパスを開設することに関心を示していると述べた。教育大臣は、今週米国を訪れ、ハーバード大学やマサチューセッツ工科大学などのトップクラスの大学に対して、タイにキャンパスを設置することやタイの教育機関と提携することがいかに魅力的であるか、説明をしてくる予定であると語った。

Teerakiat 大臣によると、タイランド 4.0 を成功させるため、タイは現在と未来の働く人々に必要なスキルを身につける必要があり、海外の高等教育機関がタイの大学に欠けている資源や人材の不足を補うことができると考えている。「もう何年も多くの海外の大学が、タイはこの地域の国際教育拠点となる可能性があると考えており、タイに海外拠点を開設したいと考えていたが、Ohec の規制の下では海外の大学はタイにおける運営にはタイ側のパートナーが必須であり、それが外国人投資家の負担となっていたため、今回その規制を緩和した。今回この機会を有効活用する人達が確実にいるだろう」と述べた。

タイ大学学長会議の Suchatvee Suwansawat 氏は、この政策が長期的に見て高等教育に恩恵をもたらすことになるため、タイの大学は競争を恐れるべきではないと述べた。「世界中のトップクラスの大学に入学することは、多大なる恩恵をもたらすことになるだろう」。

メッシ、ロナウド、ベッカムのようなサッカー選手がタイのプレミアリーグでプレーするようなものだ。地元の選手たちは、世界最高のものから学ぶことができるだろう」彼は言った。

(2017 年 10 月 4 日 Bangkok Post 紙)

■政府は妊娠中の学生をサポートする法案を検討中

内閣は「望まない妊娠」のために苦労している学生に対して、十分な支援を確約することを目的とした省令案に原則合意した。

この省令案は、教育機関に性教育の質を向上させることも求めている。この省令案は「教育機関の種類を決定し、十代の妊娠問題の予防と解決を規定するための省令」と命名された、と政府の広報担当官の Athisit Chiyanuwat は語った。

原則として、省令案の下で規定されたすべての教育機関は、在学中に妊娠した学生が「柔軟な」対応により、学業を続けられるようにする必要があると Athisit 氏は述べている。教育機関も、妊娠中に学業を中断し、出産後に育児に追われる学生を、処罰したり責めたりしてはならず、関係機関は学生が学校に戻って学業を再開するという学生の要求を承認する必要がある。また加えて、施設に適切なリプロダクティブ・ヘルス・サービスを提供する必要があると述べている。

これらの教育機関を統括する機関は、十代の妊娠問題の予防と解決のフォローアップの両方を担当する責任を負う。省令案を引用して、彼はこれらの変更により遵守する必要がある教育機関の種類は、初等中等教育機関、職業学校、高等教育プログラムを提供するすべての関係機関であると述べている。

彼らは、十代の妊娠の場合に学生に適切な支援を提供するための仕組みを構築し、在学中の妊娠の場合には学生の機密性とプライバシーを守ることが求められる。すべての教育機関は性に関する教育を提供する必要がある、これは教育実績の評価に含まれる新しい仕事だと同氏は述べている。

高等教育機関であるカレッジや大学においては、性教育と十代に対するカウンセリング訓練を統合し、必要に応じて教育内容に組み込む必要がある。

(2017 年 10 月 5 日 Bangkok Post 紙)

■イノベーションのためには若者の育成が必要

タイ国家イノベーション庁 (NIA) の Phanart Chairat 部長は、タイランド 4.0 のビジョンの下でイノベーション主導の社会を作りたいと考えるならば、6 つの側面すべてにおいてイノベーションを促進するために焦点を当てなければならないと述べた。

Phanart 部長はインタビューで、このような社会を作り出すための最優先事項は、政府が医療、治安、水管理などの公共サービスに新しいアイデアを適用する際に主導権を握る公共部門のイノベーションであると述べた。

第 2 に地域ベース・イノベーションであり、バンコクやパタヤなどの大都市ではイノベーションを適用する分野として知られている。シンガポールで見られるように、将来の課題に対処するために都市部において、多くのイノベーションが発明されており、それらは製造業に適用されている。

第 3 は現状の決済システムをはるかに超える財務イノベーションであり、それはまた革新的な借り入れチャンネルも必要とする。

第 4 に、タイは「思考のイノベーション」を必要としており、これは教育システムに直接関係している。

第 5 は、恵まれていない人々を含む社会における人々に関わる社会イノベーションである。

第 6 は、無公害ビジネスの世界的な需要増に対応するためのグリーン・イノベーションである。

「世界は過去 10 年間で大きく変わった」と Phanart 氏は述べる。

「これらの 6 つの優先事項すべてが実施されていない場合、グローバル・イノベーション・インデックスにおける我々の最も良いランキングは、過去数年間で 48-50 位の範囲にとどまる」。2017 年のグローバル・イノベーション・インデックスでは、タイは 51 位、2016 年は 52 位、2015 年は 55 位、2014 年は 48 位、2013 年は 57 位である。タイの資本市場においては、イノベーションの開発の余地は多いものの、教育システムは遅れており、これがスキル開発の伸び悩みにつながっていると考えられる。

Phanart 氏は、タイランド 4.0 のビジョンは、社会のすべての人々の協力なしでは実現されないと指摘した。

タイランド 4.0 の戦略が発表されて以来、イノベーションに対する意識が高まっているが、依然として研究の分野に集中している。世界は変わり、多くの製品やプロセスが時代遅れになっている。イノベーションなしでは、多くのタイ製品は世界市場で増え続ける競争に直面するだろう。

「もしある国が、タイの農産物に輸送関連の CO2 料金を課した場合はどうなるだろうか？タイの企業はどのようにそれに対処するだろうか？」

しかし、部長は肯定的な見方を示した。過去 2 年間で、イノベーションに関する議論が増え、タイ企業の間では危機意識が高まっている。

より多くのエントリーが NIA イノベーション賞に応募している。NIA は、タイの証券取引所と協力して、一部の上場企業のイノベーションマネジメントの監査にも役立っている。「現在の緊急の課題は、将来職場で熟練労働者を育成するために、企業が真剣に考え、教育機関が努力を重ねることだ。」科学技術省の機関である NIA もこの点でより大きな役割を担っている。その焦点は、中小企業からスタートアップにまで広がっている。起業家や投資家とのネットワークと同様に、テクノロジーベースの新興企業のための共同作業スペースが創設された。

NIA は、能力のある学生を育てるために全国の 30 の大学と協力している。優れたアイデアを持つ学生に対しては、彼らのビジネス・プロトタイプを完成させるために 100,000 バーツが提供され、起業することを視野に入れ、ビジネスモデルの開発やスタートアップが登録されているインターンシップのような、開発のための更なるトレーニングを受けることが可能だ。過去数年間、1,000 を超える中小企業やスタート・アップがイノベーションプロジェクトを NIA に提出している。NIA のイノベーション・クーポンと NOW ベンチャー・スキームから、マッチング・ファンドにおいて 150 万バーツを受け取ることが可能である。

2016 年に NIA は食品加工業界を含む 98 のイノベーションプロジェクトに 1 億 4185 万バーツ強の資金提供を実施した。NIA は、この新しい年度から、全国の 800 の職業学校と共に活動をしており、職業学校の生徒は「タイランド・ピッチング・チャレンジ」に参加して賞金を獲得し、スタートアップから学ぶ機会を得る。ほとんどのタイ中小企業はまだタイランド 2.0 バージョンの枠組みに残ったままで、自動システムでタイランド 3.0 バージョンに移行するには 5 年かかることがある。学生に焦点を移すことによって、我々はイノベーターを生み出すことを目指す」と彼は語った。

Phanart 氏は、タイには技術イノベーションがエンジニアリング・プロセスに関係しているという誤解がまだあり、依然としてそのことに悩まされていると主張している。サービス業が国内総生産 (GDP) の 53%を生み出す国においては、視点を変えなければならない」と付け加えた。

(2017 年 10 月 16 日 The Nation 紙)

■チュラロンコン大学 アジアのトップ 50 に食い込む

タイの多くの大学において、今年アジアの高等教育機関の Quacquarelli Symonds (QS) のランキングが下降している。水曜日に発表された最新の 2018 年 QS アジア大学ランキングでは、Chulalongkorn 大学 (CU) がトップ 50 入りを果たした。

100 点中 67.1 点を獲得し、昨年 45 位から、アジア 17 カ国 450 大学のうちの 50 位になった。Mahidol 大学 (MU) は、今年スコアは 63.8 ポイントであり、61 位から 58 位に 3 つランクを上げた。Thammasat 大学 (TU) も 101 位から 97 位にランクをあげ、タイの高等教育機関では 47.8 点で 3 番目につけている。しかし、Chiang Mai 大学 (CMU) は 104 位を維持できなかったものの、代わりに 47 ポイントを獲得して、112 位に落ち着いた。一方で、King Mongkut 工科大学トンブリ校が 161 位から 171 位に下がり、Kasetsart 大学は 129 位から 149 位に落ちた。Khon Kaen 大学も 165 位から 178 位に後退し、Prince of Songkhla 大学は 185 位から 188 位にランクを落とした。King Mongkut 工科大学ラカバン校は、251 位から 261 位に落ち、Suranaree 工科大学は 251 位から 301 位にランクを落とした。

対照的に、シンガポールとマレーシアのトップ大学はすべて前年度よりも優れた成績を収めている。Malaya 大学 (UM) は、ランクを 3 つ上げ 24 位となり、マレーシアの国立大学のトップを維持したが、マレーシア科学大学 (USM) は 13 位の順位を上げ 36 位に昇ってきた。シンガポールに拠点を置く南洋理工科大学 (NTU) は、アジアで最も優れた大学として国立シンガポール大学を抜き、ついに 1 位を獲得した。

ロンドンに拠点を置く教育およびキャリアコンサルティング会社である QS は、年間ランキングが、70,000 人以上の研究者と 44,000 人の職員を対象とする研究、教育、雇用状況および国際化で判断されると述べた。

スコアは以下の 9 つの指標に基づいている：学術的な対外評価 (30%)、雇用者からの評価 (20%)、教員一学生比 (15%)、論文あたりの引用数 (10%)、教員あたりの論文数 (10%)、博士号を持つ教員 (5%)、外国人教員の比率 (2.5%)、留学生の比率 (2.5%)、海外からの交換留学生数 (2.5%)、派遣交換留学生数 (2.5%) となっている。

タイ高等教育委員会 (Ohec) の Suphat Champatong 事務局長は、このランキングにおけるタイの大学のスコアは、英語による学術研究論文数の不足と質の高い講師の不足を反映していると語った。「タイの大学が国際ランキングをよりアピールしたいのであれば、より多くの研究論文を英語で出版する必要があり、アカデミックランクが高い講師を増やす必要がある」と Suphat 氏は述べている。彼はタイの大学の教員のわずか 3 分の 1 しか、助教授、准教授、教授などの資格を保有していないが、世界をリードするトップ大学ではほぼ 100% 資格を持っている。

しかし、タイ高等教育委員会 (Ohec) は、タイのトップ大学の国際レベルでのランキングを上げることがサポートするための 10 年計画を立てている、と述べている。

この計画の下で、タイのトップ大学はタイ高等教育委員会 (Ohec) から巨額の研究費の交付を受け取ることになる。

(2017 年 10 月 19 日 Bangkok Post 紙)

■大学は基金を探している

タイの私立高等教育機関協会 (Apheit) は、私立大学 2 校が入学者数減により閉鎖を余儀なくされ、先日政府に支援を要請した。

Apheit の協会長である Pornchai Mongkhonvanit 氏は、タイの高等教育市場は、学生数の減少とともに、長期間にわたってその規模が縮小しているため、多くのタイの私立大学は現在、閉鎖の危機に瀕していると警鐘を鳴らしている。

ある情報によると、私立大学に入学する新入生の数はここ数年で 50% 近く減少している。

Pornchai 氏は、出生率の低下が明らかに新入生の数の減少の裏にあり、加えて私立大学の年間予算が入学者数頼みのため、国立大学よりも私立大学にとっては負担が大きいと指摘している。

「タイにある 70 校の私立大学のうち、自立しているのは、わずか 10 校だけである。残りは、タイの高等教育市場が今後も縮小して行くため、より多くの支援が必要な大学は、中小規模の大学である」と彼は述べている。

Pornchai 氏は、特に小規模の私立大学は、長期的に生き残るための戦略を立てる必要があると述べている。これらの大学は、相互に協力し合い、あまり需要のない古い学部・学科を廃止する必要がある。

「私立大学は、学生数ではなく、むしろ質に重点を置くべきであり、一部の大学は合併する必要があるかもしれない」と彼は語った。

しかし、Pornchai 氏は、人員や施設の質を維持するためには予算面において、政府からの支援が必要だと述べた。「大学の運営費には多額の資金が必要であり、政府が研究プロジェクトのために奨学金や予算を増やすことで大学を支援してくれるのが望ましいことである」と Pornchai 氏は述べた。

(2017 年 11 月 12 日 The Nation 紙)

■国立校に民間支援

国立校を非営利団体が運営するという来年からスタートするパイロット・プロジェクトの提案について、Prayut Chan-o-cha 首相が非公式ではあるが、すでにゴーサインを出していると国立教育委員会事務所 (Oneec) が公表した。

「首相は、民間セクターが教育に携わるという「計画」に同意している。」と Onec 事務局長 Chaipayruek Serirak 氏は述べ、しかしながら、民間事業者は同省が定める指標に従わなければならないと付け加えた。この提案は、Prayut 首相が議長を務める「タイランド 4.0」政策に向けた改革運営委員会の会議で提起された。

公共部門開発委員会事務局 (OPDC) は、学校運営の改善の一環として、この計画を発表したと Chaipayruek 氏は述べた。

この提案の下で、OPDC は公立校をより柔軟かつ効果的な方法で運営するために、教育省と民間セクターと公的 school モデルを適用するために協力する予定であると述べた。

民間事業者は、定期的に業務の査定を受けることで 5 年間学校を運営することが許可されるだろう、と Chaipayruek 氏は語った。

これらの民間事業者は、収益事業体であってはならない、と彼は述べた。

彼はまた、民間事業者は生徒の学習達成に対して責任を負わなければならない、生徒のイノベーションを創出し、その土地の特色を反映するように調整しなければならないと主張した。

このスキームに参加する学校には予算が配分され、生徒は教育費やその他の経費をかけずにそこで学ぶことができると Chaipayruek 氏は述べた。

これらの学校は、地方における教育関係者及び教育サービス地域オフィスの長を含む政策委員会によって監督される、と彼は述べた。県立学校のような主要校は対象外になるだろう、と彼は述べた。

来年の第 1 学期に、全部で 77 校のパイロット・スクールがこのスキームに参加することが可能である。このパイロット・プロジェクトに参加している学校の教師は、公務員に留まるか、その学校の教員になるかを選択することができる。

(2017 年 11 月 12 日 Bangkok Post 紙)

■学校支援基金の設立

内閣は昨日、低所得者層の子供の教育費用を支援するために、当初予算 10 億バーツの教育基金の設立を承認した。

首相官邸の Kobsak Phutrakul 氏は、この新しい基金は所得格差を縮小し、生活の質を向上させることで、低所得の家庭にも教育の機会を得られるように支援することを目的としていると述べた。

内閣はまた、昨日、教育における平等を促進するための、特に低所得者層の 430 万人の子供たちのための法案を承認した。

この原案は、10 億バーツの当初予算とは別に、今年度の教育省の財政予算年間約 250 億バーツの 5% を予算配分することを要求しているものである。納税者および企業は、税額控除と引き換えにこの基金に貢献することも可能だ。

Kobsak 氏は、タイ政府はこの基金を管理する委員会を設立する予定であると述べた。別の展開として、内閣はまた、2018 年度の商業活動緩和計画を承認した。

タイは世界銀行のランク付けにおいて、2017 年には 48 位であったが、2018 年には 26 位に上昇しており、次の「ビジネスアクション計画 2019 年」において、タイ政府はアセアン内での 2 位を目指している。

首相府の Suwit Maesincee 大臣は、今年の早い時期に、タイ政府が官僚システムの改革、特にサービス分野、法改正、政府のデジタル化の分野について、継続的に政府が実施してきた目標を達成するだろうと述べた。

優先領域は、顧客サービス、地籍調査、食品医薬品局 (FDA) の承認プロセス、そして教育マネジメントの分野である。

タイ財務省関税局は、天然ゴム、米、砂糖、冷凍食品などの戦略商品の輸出入手続きを、60 日から 1 時間に、危険物の処理については 6 カ月に短縮する必要に迫られた。

FDA は、薬物と食品の登録手続きを 280 日から 220 日間に短縮する必要に迫られる一方、知的財産局は 2019 年の早い段階までに、知的財産権と特許出願の 30,000 件を承認できるようスピードアップする必要がある。

(2017 年 11 月 22 日 Bangkok Post 紙)

■Obec 学校プロジェクトから撤退

タイ教育基礎教育局 (Obec) の事務局は、5,032 校にも及ぶタイ全土の小規模校の学校環境の改善を支援する目的で発足したばかりの「ICU スクールプロジェクト」を廃止することを決定した。

Obec 事務局長の Boonrak Yodetch 氏は、この 1 年間に、1,964 校の小規模校に対して 5 億バーツを費やし、校舎や学校の施設を改装し、より多くの教員を採用するという成果を挙げたため、ICU スクールプロジェクトを終了することを決定した、と昨日発表した。

「我々は緊急に支援が必要とされる約 2,000 校の状況を改善することによって、いくつかの問題が解決された。したがって我々は残っている 3,000 校については、通常の予算で十分に支援可能であると考え、このプログラムを終了することを決めた。」と彼は語った。

ICU スクールプロジェクトとは別に、Obec は、教室外において教員に多くのペーパーワークの負担を強いてきた各種プロジェクトも終了もしくは統合する予定である。

「教師が関わる外部のプロジェクトが少なければ、教室で生徒と一緒に過ごす時間が増えるだろう」と Boonrak 氏は語っている。

しかし、匿名希望のある校長は、ICU スクールプロジェクトに参加している学校の中で、Obec の支援を全く得られていないままの学校は 3, 0 0 0 校も残っているため、Obec の決定には唖然とさせられる、と話している。彼は、このスキームの下にある学校は、学校設備の開発と教員採用の予算の承認が他と比べて早いと述べている。

例えば、このプロジェクトの中には、教員不足の問題に直面している 2, 2 6 1 の学校がある。これらの貧しい学校の多くは、1 人の教員が全科目を教えているが、新しい教員を迎えることができたのは、わずかに 4 2 7 校だけであると彼は述べている。

彼はなぜ Obec が最初から非常に多くの学校をプロジェクトに追加したのか、理解できないと言う。

彼はまた、どの学校が本当に援助を必要としているのか、していないのか、という Obec の選別の基準に疑問を持っている。

ICU スクールプロジェクトは、Teerakiat Jareonsettasin 教育大臣が昨年立ち上げた。Obec は当初、緊急のサポートを必要とする 3, 0 0 0 校を ICU スクールとして認定した。このプロジェクトに参加する学校数は、後に 5, 0 0 0 校にまで増え、予算は 5 億バーツから 1 0 億バーツに倍増した。

(2017 年 11 月 22 日 Bangkok Post 紙)

■過去に失敗した教育改革が、新しい解決法に

教育省は、タイの教育分野の改善どころか、州の教育委員会の設立によって、独自の解決方法が必要とされる重大な問題を引き起こしている。

Teerakiat Jareonsettasin 教育大臣は、国家平和秩序評議会 (NCP0) の議長である Prayut Chan-ocha 首相に対して、委員会の設置について、その命令を修正するように提案すると最近明らかにした。

4 月に Prayut 首相は、NCP0 のトップとして特別な権限を行使し、教育改革の活性化が期待される州の委員会の導入を決めた。その委員会は、関連機関の統合を促進し、教育機関や教員の就職・人事異動にからむ賄賂の問題を終わらせることが期待された。

しかし、委員会の運営が始まると、増加する教育の人件費や人材管理の遅れなど、いくつかの問題が浮上した。

教育サービスに関連する事務所長もまた、彼らが有する業績の評価や給与調整などの様々な人事管理業務を決定する権限を剥奪する委員会の設立に激しく抗議した。

今週初め、Teerakiat 大臣は、既存の州教育委員会に代わり、2 つの別々の委員会を各州に設置することを提案することを確約した。

第 1 の委員会は、基礎教育委員会、私立教育委員会、非正規/正規教育委員会、および職業教育委員会の下での取り組みを統合する。

第 2 の委員会は、地方の教育事務所の元所長たちが、外部要員として、教育関係の職員の雇用や異動などの教育分野の人事を扱うことになる。

チュラロンコン大学教育学部の Sompong Jitradub 講師は、昨日この解決策に同意すると語った。

「過去数ヶ月間、教育サービス分野の所長たちと地方の教育委員会の間に、多くの問題が起こった」と彼は語った。Sompong 講師は、16 の州において関係者と話し合った後、組織が官僚主義的であり、衝突を引き起こしていることがわかったと話している。

「当初の期待とは異なり、結果がついてきていない」と同講師は述べた。Sompong 氏は、地方教育委員会は 90% の時間を人事に費やしており、教育の質の問題に取り組む時間がほとんどないと付け加えた。

さらに、委員会の設立以来、人件費が増加していることに気が付いたと述べている。「人件費は教育省の予算の 70% から 80% にまで増加し、学校や生徒に行き渡るはずの予算割合が低下している」と Sompong 講師は述べている。

地域教育理事の集まりの議長である Tanachon Mutaporn 氏もまた、報告された解決策に賛成だと語った。「この提案は、Dapong Ratanasuwan 将軍が教育大臣だった期間に、私が教育省に提案したのとまったく同じである」と彼は述べた。人事問題を扱う委員会を設置することによって、他の委員会が教育の統合と改善に専念できるようになるだろう、と Tanachon 氏は述べている。Tanachon 氏は、「人事委員会は、人事異動や任命に関連する汚職や賄賂の抑止としても役に立つだろう」と述べた。

基礎教育委員会事務局の Boonrux Yodpheth 事務局長は、この委員会は、優れたガバナンスを確保するために、地域の理事たちの権力のバランスを保つだろうと述べた。「そこにはチェック & バランスのメカニズム機能が働くだろう」と彼は述べた。

(2017 年 12 月 9 日 The Nation 紙)

日本学術振興会バンコク研究連絡センター アクセス&コンタクト

アクセス

高架鉄道 (BTS) Asoke 駅、1 番出口から徒歩 5 分
地下鉄 (MRT) Sukhumvit 駅、1 番出口から徒歩 5 分

コンタクト

1016/1, 10th floor, Serm-mit Tower, 159
Sukhumvit Soi 21, Bangkok 10110, Thailand
Tel +66-2-661-6533 Fax +66-2-661-6535
Website: <http://jsps-th.org> Email: jspsbkk@jsps-th.org
Facebook: JSPSBangkok



■ 表紙写真紹介



The Putra Mosque (プトラジャヤ、マレーシア)

クアラルンプールから南へ 25km、マレーシア国際空港とのほぼ中間にある行政新首都であるプトラジャヤ (Putrajaya)。

観光の中心となるプトラ広場 (Dataran Putra) にあるのが、その姿からピンクモスクとも呼ばれるプトラ・モスクです。

ピンクを基調とした建物とイスラミック文様は、遠くからでもひととき目をひきます。

■ 編集後記

2017 年度第 3 号となる「バンコクの風」をお届けいたします。今回も国際協力員 (神戸大学) の土肥が編集後記を担当させていただきます。

今回の特集記事では、キングモンクット工科大学トンブリ校の国際関係担当学長補佐であるアナック・カンタチャワナ氏に、「タイ国における大学入試制度について」と題して、ご寄稿いただきました。大変お忙しい中、貴重なお時間を割いて本稿のためにご執筆いただきましたことをこの場を借りて御礼申し上げます。

今回の表紙の見開きには、バンコク研究連絡センターの恒例行事である「タイ伝統衣装」を着て撮影した写真を使用しました。衣装は 1 人 1 人色もデザインも違います。装飾品は盛りに盛られ、私の左肩には「鳳凰」も乗せてもらい、とにかくおめでたい感じに仕上げて頂き、とても良い思い出となりました。

(バンコク研究連絡センター 国際協力員 土肥 亜紀子)

JSPS バンコクニュースレター「バンコクの風」

監修：山下邦明 編集長：古屋寛子

編集担当：斉藤康平、土肥亜紀子